

団体名		佐那河内村ボランティアグループ ひまわり会 (徳島県佐那河内村)	
団体の概要	活動開始年	西暦 1988 年 3 月 活動開始	
	メンバー	人数	< 役員数 > 4 名 < 事務局スタッフ数 > 1 名 < 賛助会員数 > 15 名
		構成	50 歳以上の女性をもって組織
	予算規模	平成13年度概算 ・収入 ¥217,650(会員の年会費、村・社会福祉協議会からの助成金) ・支出 ¥208,356	
団体の目的		<ol style="list-style-type: none"> 1. 健やかな老後を目指して心と体の健康づくり 2. ボランティア活動の進め方の学習 3. 地域の環境美化と福祉の向上 	

ボランティア活動の概要

< 国道沿いの空き地を整備しての花作り >

国道沿いにある休耕田や廃材置き場等、地主の方々と話し合っ借りた無償の土地を整備した。大きな材木や石は何人もが力を合わせて運んだ。見事な花壇が出来上がり、大変嬉しかったことを昨日のことように覚えている。

< アジサイの植栽 >

佐那河内村には、村の宝である大川原高原がある(村有地)。徳島市の奥座敷で、海拔約1000mの高原である。ここに1988年から毎年、アジサイの苗を植え続け、今では2万本になっており、6月から8月にかけて素晴らしい眺めを臨める。2、3月にアジサイの植樹、6、7月に根本の草刈りなどの手入れを行っている。

このほか、村内の主要道路の空き缶・空き瓶等の清掃や、施設へ入所している方を訪問しての勉強などの活動を行っている。

ボランティアは村の広報紙で毎年2月に募っている他、口コミでも呼びかけている。

ボランティア活動を立ち上げた経緯

初代の会長の「50歳以上の元気な者が、村をよくしよう」という心意気から始まった「健康と呆け防止学級」として発足し、歩いたり指先を使う運動などをするとともに、庭先の花いっぱい運動やお年寄りの介護方法の勉強会などに取り組んでいた。

平成5年開催の東四国国体の際に、聖火の通る沿道を花で飾ろうということで、本格的

な花作りに取り組むようになった。

その後さらに活動の内容を広げ、環境汚染に関する勉強などにも取り組むようになった。

活動を継続するための工夫

活動は村をきれいにして、皆さんに見てもらいたい、という気持ちで行っている。道行く人たちから心がやすらぐなどと感謝される、やりがいのある仕事である。また、全国花いっぱいコンクールや、チャレンジ徳島優良賞優秀賞、建設大臣感謝賞、道路協会表彰状など、数多くの表彰を受けている。賞は活動に付随してついてきたものではあるが、賞を受けることは活動を進めていく上で励みになる。

同じ志を持った人の相互理解を元にした活動であり、人の和、チームワークはばっちりである。

ボランティア活動を行う上での困難点や課題

会員は花が大好きな者ばかりであったが、人々に花を見て喜んでもらえる様な場所が見つからず、土地がない、お金がないという、ないないづくしの出発であった。そして発足当初は、役場の何課へお願いしても受け入れてもらえなかった。そのため、初代の会長のポケットマネーで花苗、花の種、農薬、肥料等を買ひ、会員も年会費1人当たり¥5,000を出した(年会費は現在も継続)。

また、発足当初は若くて美しくピチピチしていたが、16年経つと健康ではあるものの、身体に痛いところが出てきている。身体に気を付けて一日でも長くボランティア活動を続けていきたいと思う。そして地域社会から受けた恩を少しでも返していきたいと願っている。

(団体代表者によるレポート、団体代表者へのヒアリング調査、地域づくり百科「地域づくり団体プロフィール集」<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/>より作成)

<事例のポイント> 外部評価が活動の大きな励み

花作りという活動は、もともと周囲の人から感謝されることの多い活動であるが、「佐那河内村ボランティアグループ ひまわり会」はそれだけでなく、村外の多数の機関から表彰を受けている。

「地域へのご恩返し」という趣旨での活動ではあるが、地域外からの表彰が、活動の価値が地域の内部に留まらないことを明確にするとと言える。こうしたことが、活動を継続していく上での励みになっている。

<事例のポイント> イベントをきっかけに活動が活性化

ひまわり会は、もともとは「健康と呆け防止学級」として発足したが、国体の際の沿道の花作りがきっかけとなって、活動が広がった。

イベント等による地域外の人々との交流がきっかけとなって、活動を活性化したと言える。ボランティア団体の支援にあたっては、発足時の支援だけでなく、活動の活性化、あるいは、活動の展開という観点から支援が必要になるときもある。

<事例のポイント> メンバーの高齢化が課題

発足から16年がたち、当初元気だったメンバーの高齢化が進んできている。会員の健康状態にあわせた活動の模索や、新たな会員募集などが課題となる可能性がある。

これは高齢者が主体となっているボランティア団体に共通の課題であり、団体支援にあたって留意すべき事項の一つである。

メンバーの高齢化に対しては、団体に若い世代のメンバーが参加するような仕掛けを考えて、団体メンバーの世代の多様化を図っていくことも一つの方法である。例えば、社会情勢の変化や時代の潮流に対応して活動内容を変えることで、若い世代にとっても魅力的な活動としていくことなどが考えられる(環境分野の自然共生の潮流に対応して、ビオトープづくりに取り組むなど)。